

古代道路からみる古代山城の機能

別府大学大学院 文学研究科 文化財学専攻

学籍番号 M1613002 中原彰久

古代山城は従来より論争はあったものの城郭論が定説となった。その中で次の研究の展開として古代山城がどのような役割を担ってきたのかということに行き着く。それを紐解くため既存の研究としては瓦の比較や類似性や土器の出現時期と出土量などの出土物や山城自体の構造である石塁や城門に着目してきた。私は、今回の研究として古代山城と古代道路の関係性に着目した。古代山城は、従来 660 年代といわれてきたが最近の出土遺物より古代山城の出現時期がもう少し新しくなるのではないかという研究がある。併せて古代道路についても遺構と出現はするが時代設定が難しいが 8 世紀よりも前に道路というものが作られている可能性や車路と呼ばれる延喜式駅路よりも以前の道路といわれるものの出現により二つの遺跡が近い時代に築造されたと考えることができる。それらにより国府と山城の関係性を見出した高橋誠一氏や官道と山城の関係性をみた木下良氏などが先行研究としてあげられるが特に私は古代山城を官衙とした時、官衙の遺跡のように南もしくは道路の方向に門が開くような関係性を持つのではないかと考え、それを古代山城の城門方向に見出そうとした。古代道路は最近推定路線ではなく発掘事例から裏付けされる路線の精度が上がっており、それらの検出成果も含めて採用した。古代山城の城門の痕跡は現位置を留めていない例も多くあるため細かな方向までは不明である。不明なところは道路位置と古代山城の築城されている山地の緩傾地を明確にすることで門の設置位置の推定を行っていった。①道路から山城が見える方向②古代山城の地形③古代山城の開門方向④城門の規模⑤周辺官衙の所在などの 5 項目をもって検討した。それにより古代山城は基本的に道路沿いに作られることが多く、道路位置と周囲の自然地形を意識した配置であると思われる。さらに道路には「上りと下り」の概念があり、上り方向の路線では山城は緩傾地を道路に向け、城門の開門もみられる。それに対し下り方向の路線では山城は周囲の山により視覚できず、容易に近づけないように川が分断し渡河する必要がある。また周囲には国府よりも郡衙が近接しており、体制としてまだ成り立っていない地方において国司は配属先に訪れる国宰（くにのみこともち）であり、実質の地方統治はいまだ郡司によるところが多かった。このように周囲の官衙遺跡についても触れ、古代山城の機能について検討した。